

広島県感染症発生動向月報

[広島県感染症予防研究調査会]
(平成19年5月解析分)

1 疾患別定点情報

(1) 定点把握(週報)五類感染症

平成19年4月分(平成19年4月2日～4月29日:4週間分)

No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号	No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号
1	インフルエンザ	3,852	8.37	1.87	↓	12	ヘルパンギーナ	56	0.19	0.11	↗
2	RSウイルス感染症	42	0.15	-	↓	13	麻疹	2	0.01	0.01	
3	咽頭結膜熱	127	0.44	0.27	↘	14	流行性耳下腺炎	55	0.19	1.06	↘
4	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	446	1.55	1.02	↘	15	急性出血性結膜炎	2	0.03	0.03	
5	感染性胃腸炎	1,964	6.82	8.56	↘	16	流行性角結膜炎	85	1.12	1.31	↗
6	水痘	387	1.34	1.63	↘	17	細菌性髄膜炎	1	0.01	0.01	
7	手足口病	43	0.15	0.18	↘	18	無菌性髄膜炎	0	0.00	0.05	
8	伝染性紅斑	71	0.25	0.22	↘	19	マイコプラズマ肺炎	28	0.33	0.19	↘
9	突発性発しん	143	0.50	0.68	↘	20	クラミジア肺炎	0	0.00	0.00	
10	百日咳	2	0.01	0.02		21	成人麻疹	1	0.01	0.00	
11	風しん	0	0.00	0.03		「過去5年平均」:過去5年間の同時期平均(定点当り)					

(2) 定点把握(月報)五類感染症

平成19年4月分(4月1日～4月30日)

No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号	No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号
22	性器クラミジア感染症	49	2.13	1.96	↘	26	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	112	5.33	5.55	↗
23	性器ヘルペスウイルス感染症	14	0.61	0.65	↘	27	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	35	1.67	2.72	↗
24	尖圭コンジローマ	18	0.78	0.50	↘	28	薬剤耐性緑膿菌感染症	0	0.00	0.35	
25	淋菌感染症	31	1.35	0.77	↗	「過去5年平均」:過去5年間の同時期平均(定点当り)					

急増減疾患!!(前月比2倍以上増減)

急減 インフルエンザ (16,293件 3,852件)
急減 RSウイルス感染症 (126件 42件)

発生記号(前月と比較)

急増減	↑	↓	1:2以上の増減
増減	↗	↘	1:1.5～2の増減
微増減	↗	↘	1:1.1～1.5の増減
横ばい	→		ほとんど増減なし

定点把握対象の五類感染症(週報対象21疾患,月報対象7疾患)について,県内178の定点医療機関からの報告を集計し,作成しています。

	内科定点	小児科定点	眼科定点	STD定点	基幹定点	合計
対象疾病No.	1	1～14	15,16	22～25	17～21,26～28	
定点数	43	72	19	23	21	178

2 一類・二類・三類・四類感染症及び全数把握五類感染症発生状況

類別	報告数	疾患名(管轄保健所)
一類	0	発生なし
二類	42	結核〔広島市保健所(15), 呉市保健所(5), 福山市保健所(4), 広島地域保健所(6) 芸北地域保健所(2), 東広島地域保健所(2), 尾三地域保健所(6), 福山地域保健所(1) 備北地域保健所(1)〕
三類	2	細菌性赤痢(1)〔広島市保健所〕 腸管出血性大腸菌感染症(O103)(1)〔備北地域保健所〕
四類	2	つつが虫病(1)〔尾三地域保健所〕 マラリア(1)〔広島市保健所〕
五類全数	3	劇症型溶血性レンサ球菌感染症(1)〔広島市保健所〕 後天性免疫不全症候群(2)〔広島市保健所, 呉市保健所〕

3 一般情報

麻しんの流行について

麻しんは、「はしか」とも呼ばれ、発しんと発熱を主な症状とする古くから知られたウイルス性の感染症です。

国の発生動向調査によると、全国3,000箇所の小児科定点からの麻しんの報告が第13週以降増加しており、第17週の103例の報告数は、平成12年以降、最も多い報告となっています。特に埼玉県、千葉県、東京都など関東地域で多く報告されており、集団感染も報告されています。また、他の地域でも報告数が増加するなど流行が懸念されています。

病原体 麻しんウイルス 人だけが感染し、感染力がきわめて強いウイルスです。

症状 感染すると10～12日の潜伏期間を経て、38度前後の発熱が2～4日続き、咳、鼻水、結膜充血などの症状が現れます。

38度前後の発熱が一度治まりかけたかと思うとまた39～40度の高熱となり、発しんが耳の後ろあたりから出はじめ、首や顔、体全体に現れます。2～5日続き、咳、鼻水、結膜充血などの症状が現れます。発しんが現れる前に、口中の頬の粘膜に約1mmの白い斑点(コプリック斑)が現れるのが特徴です。

発熱は、3～4日で治まり、次第に発しんもなくなります。しばらく色素沈着が残ります。合併症として、肺炎、脳炎、中耳炎、気管支炎などがあります。

感染経路 患者のせきやくしゃみなどからの飛沫感染や患者との接触により感染します。また、鼻やのどの分泌物に汚染された物からの間接的な接触による感染もあります。

予防方法 予防接種を受けることが効果的な予防法です。

麻しんワクチンの予防接種は、昭和53年からの定期の予防接種として実施されており、平成18年4月から生後12～24か月の間と、小学校入学前の年に接種を受けるように改正されました。1歳以上の子どもにも患者がみられることから、早期の予防接種が必要です。

また、次のことにも平素から注意し、感染をしないようにしましょう。

「手洗い」と「うがい」を励行しましょう。

患者との接触を控えましょう。

麻しんの定期予防接種

接種時期	第1期	生後12月から24月未満
	第2期	小学校就学前の1年間
接種できるワクチン	麻しん風しん混合ワクチン(推奨勧奨) 麻しんワクチン, 風しんワクチン(既往歴等により)	